

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：13701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22652024

研究課題名（和文）

戦時検閲下で、国民の心性はどう表象されたか—昭和期女性文学の対抗戦略—

研究課題名（英文） Essay on the strategy against the censorship situation -Japanese woman author's slick fictions under World War II-

研究代表者

根岸 泰子 (NEGISHI YASUKO)

岐阜大学・教育学部・教授

研究者番号：20180698

研究成果の概要（和文）：戦中期の国民心性研究として、大衆娯楽小説ジャンルを対象を挙げ、ベストセラー作家堤千代の「軍人の市民的な感情表出」をモチーフとした作品群を対象に当時の検閲状況とテキスト分析の双方から考察した。テキストからは都市新中間層と労働者・農民・大衆における愛国心と国家主義への反発の葛藤状況の諸相を析出し、堤作品の成功の理由を、「愛国心」と平時の自由主義的価値観との調整弁的機能と結論、その社会的意義を評価した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the Japanese peoples mentality under World War II, which was often recognized in Japan, as the conflict between fealty to the state and the hope to recover peaceful life. By examining the popular slick fictions at that time by Tsutsumi Chiyo, this research discusses the way how her works played a role as the control valve to release people's liberal feelings, without being prohibited by censorship. As it turned out, her strategies enabled Japanese literature to defend its principle under the age of Japanese totalitarianism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	0	800,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	300,000	2,100,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近・現代文学、女性文学、ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

日中一五年戦争期の研究は、関連する領域を相互に越境しながら、めざましい進展を遂げてきた。とくに歴史社会学および戦中戦後期の検閲研究領域では、総動員体制の実態研究や言論統制政策におけるメディア・軍部・官僚機構、出版メディアにおける商業主義と作家の文学観等の関係性について重要な知見が多く提示されつつあった。

本研究はそれらに触発され、これまでの筆者の研究で用いたところの「戦争協力」テキストにおける表象の両義性（厭戦と戦争協力の共存）という読解コードをベースに、国民という概念をさらに「階層」によって区分し、知識人と大衆の相互関係として捕捉する必要を感じていた。これは方法的に、これまで文学史の中でほとんど触れられてこなかったところの通俗小説・演劇・歌謡曲といった

大衆文化にまで射程を拡げて検閲下の状況の一端を明らかにし、国民の心性をさらに幅広く捕捉することを意味している。とくに大衆娯楽雑誌『日の出』の通俗小説欄ならではの立ち位置を生かした出版人の抵抗戦略という仮説は、文学の社会性を考える上でも筆者にとって重要な研究テーマであった。

以上のように、本研究のスタンスは、文学分析を通じた戦中期の国民心性研究であるとともに、文学研究としては、従来の文学史に対し大衆娯楽雑誌とその読者というこれまでネグレクトされてきた領域を付け加え、戦中期の大衆文学というジャンルがもちえた時代批判の可能性をも探るものといえよう。

2. 研究の目的

本研究は昭和戦中期の通俗小説というジャンルにおける女性テキストを対象として、戦時体制の検閲下で文学者が時局への批判と〈祖国〉愛という輻輳する意識をいかにして表象化しえたかを、大衆娯楽雑誌の社会的機能に留意しながら、それを時代への抵抗戦略とみなし総合的に解析するものである。同時に本研究は、戦時下の国民の心性の多義性、重層性をテキストから読み取る試みでもある。

上記については階層的な観点を導入することで、当時の「国民」像を、都市住民と兵士（軍人）、新中間層と大衆の相互の関係性のうちに求めながら論を進めている。またテキスト解析にあたっては、生活文化論を援用し、テキストが表象するさまざまな階層と職業の作中人物たちの感受性を当時の社会状況に即して解釈することをめざした。

同時に文学研究として、通俗読切小説というジャンルの特性（わかりやすさ、メリハリ、感情の強調、時事要素）に目配りしつつ、なぜこの時期に堤千代のテキストが、『日の出』や『オール読物』、『キング』といった男性ジェンダー的なメディアで圧倒的に支持されたのか、なぜ軍人と芸妓の恋、軍人と雛妓の交情といった時局的には問題をはらんだモチーフが彼女のテキストの場合には容認されたのか、編集者と田芳恵の積極的な関与を時代への抵抗とみなすことができるか、といった具体的な諸問題を、テキスト分析および読者層（大衆、知識人、女性、軍人）のおのの社会的な指向性—読者のコンテクスト—を調査することでその一端を明らかにする必要があると考える。

以上の作業を通して、昭和戦中期、とくに国家総動員体制という戦時体制への国民動因の始まりの時期に焦点化して、文学テキストの社会的機能—全体主義体制に対する国民の言語化しがたい違和感と葛藤を表象化する機能—を見出すことが本研究の目的で

ある。

3. 研究の方法

本研究にあっても、これまでの筆者の論で用いてきたマッキーバー・富士田による「多元的国家論」が分析の基本的な基盤である。それに加えて、人気大衆小説には時代の平準的イデオロギーとともに大衆の願望や批判精神が反映されるとする鶴見俊輔の大衆小説論の理念を援用し、大衆小説の一形態である通俗小説のジャンルで圧倒的な読者の支持を得たテキスト（女性作家堤千代のベストセラー）を集中的に取り上げて、戦時下の国民の心性をテキストのイデオロギー解析によって解明する方法をとっている。

この課題を考察する上でとくに昭和 12～16 年にかけての国家総動員体制の形成期の重要性に着目し、この時期の実態をより正確に把握するために、生活文化論からのデータおよび知見を援用して、この時期に再編成されていく国民のうちのとくに都市住民（新中間層）の自由主義的指向性の析出をめざすとともに、彼らと一般大衆・労働者・農民の関係性にも着目した。これは時局下での愛国心、とくに兵士への共感という感情と癒着してあらわれるため、とくにこの時期の一般大衆・労働者・農民への国家の保護政策に着目する歴史学の井上寿一ほかの考察を参照し、都市住民の葛藤的な心情の析出につとめた。

また検閲状況の確認のために、同時期の『出版警察報』および『演芸画報』、『映画検閲時報』等の一次資料および先行研究の調査を援用している。

これらの作業を通して、今次の研究では、対象とする大衆娯楽雑誌の読切小説のうち、テキストにみられる階層的なイデオロギーを考察するとともに、とくに本研究の目的に即して、同時代の国民における「愛国心」と平和時の規範や生活感情へのこだわりの相互の葛藤をもっともよく析出できるモチーフとして、「軍人の市民的感情（とくに愛情関連）」を重点的に分析することとした。

検閲状況調査については、とくに堤テキストに対する検閲の許容度という問題に焦点化して、それを具体的に測るために同時期に「軍人の恋」をとりあげた作品のうち発売禁止・削除等処分を受けたテキストを、『出版警察報』等の史料により文学・演劇・映画・レコード等のジャンルから踏査し、検閲の際の文言を分析するとともに、舞台化された堤作品への台本検閲の状況、当時の新派演劇を中心とする当時の劇界の動向にも目配りした。

テキスト分析については、本研究では大衆娯楽小説、特に読切小説という特徴的なジャンルのメディア特性に留意しつつ、ナラトロジー理論を援用しながら、テキストの語り・先行文学テキストとの呼応関係、テキストを

取り巻くコンテキストと読者の分析といった角度から考察している。

4. 研究成果

各年度の「研究実施計画」に基づき、以下に示す成果を上げた。

(1) 基礎調査

① 堤千代テキストの確定作業

大衆作家の堤千代関連の作業にもっとも力点を置き、堤のテキストのリスト作成を進め、当該時期（1939～1945）の雑誌所収の59作品を確定し、事後も作業を継続中である。

② 検閲・言論統制関連

『出版警察報』をはじめとする当時の資料を照会して昭和戦中期における文学作品に対する検閲の実情を調査するとともに、千代田図書館の内務省委託本および出版検閲コレクション等貴重資料の閲覧および講演聴講、出版検閲に関する基礎的な研究文献の収集・閲覧および検閲研究の最新情報の収集を行った。

③ 堤テキストの読者層（『日の出』および女性雑誌読者、軍人）

雑誌『兵隊』（1929.5-1944.2）、『戦線文庫』（3号、1928.10、53号、1943.3）（いずれも復刻版）の調査により、国外の戦線にいる将兵の動向、慰問品、文学に対する嗜好性、恤兵事業の方針などを概括的に確認した。

国内各地域の軍事援護方針の実態については、復刻版『昭和期『銃後』関係資料集成』（既刊3巻、六花出版）等を参照した。

女性読者の反応については、戦後の北畠八穂の「病床三〇年閨秀作家堤千代さんを訪ねて」（『婦人画報』1950.11）によって処女作をめぐる女性読者の反応を確認した。また堤千代関係者へのインタビューによって、女性読者の反応の種々相（通俗小説に対する知識人読者からの否定的な見解）を得ることができた。

④ テキストの舞台化・映画化における検閲の個別ケースの調査

『映画検閲時報』（復刻版全巻）および『演芸画報』（復刻版一部）等の資料の収集、照会を行った。

(2) 分析

① 検閲・言論統制関連

昭和10年代初頭から同15年あたりまでの文学（小説）・歌謡曲・演劇・映画に対する検閲状況を、軍人をモチーフにした作品に絞って、『出版警察報』および『演芸画報』、『映画検閲時報』等の一次資料を調査し、「小指」の特殊性を明らかにした。と

くに昭和12(1937)～13(1938)年の川上喜久子「光仄かなり」（『文学界』）、石川淳「マルスの歌」（同）に対する禁止処分に注目し、具体的な検閲方針について確認した。

また軍人の恋愛というタブー領域を取り巻く新派等演劇界の実態を調査し、昭和15～16年の新派公演で、検閲注意による台本改訂、原作と台本との異動（登場人物の付加等）、演出の変更、演劇界全体で「贅沢は敵だ」といった風潮の中での華やかな筋立てや衣装、伝統的な演目の上演に対する自粛論やそれに対する反論といった動揺が生じていることなどを確認することができた（学会発表①）。

② 『日の出』編集部の編集戦略

『日の出』編集部の情報局への抵抗意識の検証について、戦中期の検閲事情に関する最新の諸論考の参照を行った。

また下記③の分析により、テキストが大衆娯楽雑誌で求められていた人情中心の娯楽性を利用して、軍人に対する一定の敬意を保証した上で、芸妓の恋という華やかなモチーフがその限界を超えて疑似的な母子関係の表象や女性の性的な主体性を表象する段階にまで進んでいたこと、そして編集部もそれを積極的に容認していたと結論づけた。

③ テキスト分析

大衆娯楽雑誌における読切小説というジャンル特性の確定を行った。

さらにナラトロジーをはじめとするテキスト分析によって、作品の「情感」を析出し、それが同時代の大衆と新中間層に共通する戦線の兵士への感情移入に立脚していること、それをいわばアリバイとして将校と芸妓の恋愛というモチーフを展開した点に着目するとともに、テキストが通俗小説の要請するストーリーを逸脱して花柳界の女性の性的な主体性や疑似的な母性までも表象しており、それに対して兵士も含めた読者が熱狂している点を重視した。そこに検閲下の大衆娯楽テキストの独自の「抵抗」戦略を読み取ることができるという解釈である。

また戦時下における知識人の自由主義・功利主義的イデオロギー表象の析出についても一定の成果を得た。とくに一見全体主義を鼓吹するよう見えるテキスト（『日本の女の魂』1942.6）について、家父長制的ジェンダーに従順な外皮の下で合理主義といったリベラリズム的な理念を表象していることを示した。

(3) 成果発表

以下の5. に示した学会発表2件、論文発表3件を行い、昭和戦中期の文学における時局への共感と批判の葛藤の実態を、当時の社

会的な階層に着目しながら、これまで文学史の中で軽視されてきた大衆娯楽雑誌のテキストのうちにさぐった。

論文③「アジア・太平洋戦争下の大衆小説—堤千代「日本の女の魂」(昭17・6)をめぐって—」では、『日の出』というメディア自体が時局迎合の大衆誌であると認定されたためこれまでほとんど研究がなされることのなかった読切小説から、とくに全体主義に親和的とみられるテキストを取り上げ、実際には時代のジェンダーに従順に見せて実質的には合理主義的な価値観を肯定的に滑り込ませるテキストの戦略性を指摘し、このジャンルを研究対象とする意義についても示している。論文②「出版検閲下の通俗小説研究のスタンス—堤千代研究の前提として—」では、堤テキストの全体像を提示しつつ、それが都会と地方、上流階級・中流階層(進級中間層を含む)・一般大衆の三階層を広く作品世界とすること、またとくに後二者を相互の接触・交流という関係性のもとにとらえている点をその特徴として指摘した。堤テキストが一部に国策順応的なものを含む理由については、当時の国民心性の錯綜という点のみならず、通俗小説におけるマンネリズムという点からも論じている。論文①「戦時統制下のアジュール—堤千代「小指」の特異性をめぐって—」は、堤千代の作品集が新潮社の昭和16年のベストセラーとなるほどの売れ行きであったことを前提として、『日の出』編集者和田芳恵が「小指」のフェミニニティを文学の軍部への抵抗戦略として位置づけたという発言について、当時の国家総動員体制というコンテクストの読み解きおよびテキストの文学的戦略の分析によって裏付けた。論文②で指摘したように堤のテキストには時局への親和性が否定できないが、それでもその巧みなストーリー展開の随所に見いだせるリベラルな価値規範は、彼女に対する広範な読者層の支持によって担保されていたといえる。

学会発表②は大衆娯楽雑誌の通俗小説ジャンルに見いだされる国民心性という、研究全体の方法論について解説したものであり、学会発表①は、「4. 研究成果」の(2)-①についての発表であり、戦中出版史の見直しの試みとしてコメンテーターより一定の評価を得ている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 根岸泰子、戦時統制下のアジュール—堤千代「小指」の特異性をめぐって—、岐阜大学国語国文学、査読無、39号、2013、

pp. 17-38

- ② 根岸泰子、出版検閲下の通俗小説研究のスタンス—堤千代研究の前提として—、岐阜大学国語国文学、査読無、38号、2012、pp. 29-38
- ③ 根岸泰子、アジア・太平洋戦争下の大衆小説—堤千代「日本の女の魂」(昭17・6)をめぐって—、岐阜大学国語国文学、査読無、37号、2011、pp. 1-14

[学会発表] (計2件)

- ① 根岸泰子、言論統制下の通俗小説—堤千代と大衆娯楽雑誌というメディア—、日本近代文学会東海支部、2012年12月08日、愛知淑徳大学
- ② 根岸泰子、戦時下の女性人気大衆小説にみる国民の心性、日本女性学会大会、2011年7月31日、名古屋男女共同参画推進センター

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根岸 泰子 (NEGISHI YASUKO)
岐阜大学・教育学部・教授
研究者番号：20180698